全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

生かし生かされる

長崎県 長崎大学教育学部附属中学校 一年 小嶺彩

顔を洗うこと。ほかほかのご飯を食べること。歯を磨くこと。温かいお風呂に入ること。そして、水を飲むこと。これらは私たちにとって当たり前で、なくてはならないものであり、これらには全て「水」が関わっている。

「蛇口をひねれば水が出る」

私は今まで、ごく普通の当たり前のことだと思っていた。でも、社会の現状はどうだろう。私たちがきれいでおいしい水を飲んでいる瞬間、どんなに汚くてもその水を飲むしかない人がいる。私たちが自動販売機で水を買っている瞬間、世界には安全な水を手に入れられない人がいる。そう考えると、「水」とは、決して当たり前ではないことを痛感する。

水がどれほど大切なものか。私はふと曾祖母の話を思い出した。私の住む場所から、ある世界遺産が見える。それは、「端島」通称「軍艦島」だ。明治から日本の近代化を支えたその島は、もともと岩礁だったため、水の確保は非常に難しいことだった。長崎市から船で運ばれる配水が、飲み水や洗濯用水などに制限されることもあった。水が貴重な資源だったからこそ、島民全員が節水に取り組んでいた。最終的には、日本初の海底水道が設置され、水の確保ができるようになった。曾祖母はその島に住んでいた友人がとても感激していたのを覚えている、と言っていた。

長崎の歴史から探っても、水は、昔から貴重なもので、私たちの生活に欠かせないものだったことが分かる。だが、「欠かせないもの」というだけではない。

「長崎大水害」。これは、今から約四〇年ほど前の、二九九人が犠牲になった災害だ。土石流、がけ崩れ、河川の氾濫などにより、倒壊・浸水など多くの家にも被害が生じた。私は、学校でも学習し、担任の先生や両親、祖父母から実体験をきいて恐怖を感じた。「水」とは、私たちの生活に「欠かせないもの」で、私たちの生活を「脅かすもの」でもある。

もう一つ私が伝えたい水の表情、それは癒しでもあることだ。長崎県の島原市を訪れた時、私はそれを実感した。島原市は、水がきれいな町として有名だ。現在島原市には五〇か所を超える湧水地がある。そんな島原市で私は、信じられない光景を目にしたことがある。それは、車道の脇の水路を鯉が泳いでいたことだ。私が先に感じたのは、癒されるというよりも、驚きだった。今までそんな光景を一度も見たことがなかったからだ。調べてみると、島原市では、定期的な清掃が行われているそうだ。水路を鯉が泳ぐ、という美しい光景を目にすることができるのは、地元の方々の努力があってこそなのだなと思う。

私たちの生活に欠かせないもの。私たちの生活を脅かすもの。私たちを癒してくれるもの。そんな「水」に、私たちはどう関わっていくべきなのだろうか。私は、「水との共栄」が大切だと考える。互いに助け合い、栄えていく。私たちは水を使って生活する。でも、無駄にせず大切に使うことで、水と共栄することができ水に寄り添うことができると思う。

水を改めて考えていくと、当たり前だけど、ありがたいことに気付く。私の何気ない日常にも数多くある。私は習い事のダンスで、一時間以上練習すると喉が渇く。水を飲むと自然に「おいしい！」と言葉が出るくらい生き返る。このような何気ないことでも、水と生命が直結していることを感じる瞬間だ。

世界には、水を簡単に手に入れられない人がたくさんいる。私たちにできる最大限のことは、長崎大水害に関わらず津波など、災害の教訓を伝えることで、水がどれだけ大切なのかを知ること。水を決して無駄にせず、傷つけないこと。そして、多くの人に水が届くように支援することだ。この三つだと思う。私たちの豊かな生活ひとつひとつに感謝し、これを今、多くの人へ、そして次の世代へとつなげていきたい。